赤ロボロ

秋日和

里見弴

角川書店

中光印刷　宮田製本所
昭和三五年一〇月一〇日初版發行
昭和三五年一二月一〇日再版發行
秋日和　定價二六〇圓
著作者　里見弴
發行者　角川源義
株式會社　角川書店
東京都千代田區富士見町二
振替東京一九五二〇八

落丁・亂丁本はお取替へいたします

目次

秋日和　三
藝者に出る　六一
ひと昔　一〇五
あてどなく　一三七

裴頠

町春草

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

秋日和

三輪秋子

桑田の小母ちやん――これは、うちのアヤ子の呼び方が私に傳染つて、いつとはなしにさういふやうになつて了つたのだが、お茶の水時代三つ上の級にゐて、よく「S」などと揶揄はれたほど仲よしの榮さんからは、

「別だん信心家でもないあんたが、法事なんぞに無駄なお金を使つて、おまけに他人様にまで御迷惑をかけるなんて、およそ馬鹿げた話ぢやアないの。あんたの氣持だけのことなら、一人でなり、アヤちやんに付合はせるなり、お墓詣りに行つて、簡單なお經でもあげて貰つたら、それですむこツてせう。およしなさいよ、今時そんな舊弊なまね」

と、頻りにそんな風に言つて制められ、一時は私もその氣になりかゝつてゐたのだけれど、

興安寺さんから、「どういふ具合になさるのか」と、電話の問ひ合せがあつたりするうち、やつぱり世間並に、亡夫の七回忌を營むことにきめて了つた。佛事の習ひとて、七回といつても正味六年目で、昨日がその祥月命日に當つたわけ。

六年くらゐ「たつた」をつけてもいゝほどの歳月だが、私としてはずゐぶん永かつたやうな、さうかと思ふと、はツといふ間に經つて了つたやうな、夢に似た取り止めのなさで感じられる。初めの一年あまりといふものは、見るにつけ聞くにつけ、三輪の言ひ種、話しツぷり、起居振舞、何もかもがそれへ絡みついて來て、はつきり眼の前に浮かびながら、「あゝ、もうゐないんだなア」と思ふ時の寂寞さ、空虛さは、私より先に良人に亡られた友達に聞かされてゐたやうなものとはてんで雲泥の違ひだつた。その度に、「あの人たちの夫婦仲なんて、大したもんぢやアなかつたんだ」と輕蔑む氣持になつたり、その半面、「あたしなら……」と自分自身のことにして考へてみれば、ぐうの音も出ないかじかまりやうで、出來るだけそこへは觸れないやうにと氣をくばつたりしたものだ。今もつてその癖は拔けきらないにしろ、だいぶ薄らいで來てゐたことも、學生時代から特別親しくして頂いた三輪のお友達の方々ま

でお招びするやうな、現在の私の身分にしたらちつと大袈裟すぎることにさせて了つたのだらう。さういふ方々によつて語られる三輪の思ひ出話を傍聞きすることは、今なら、むしろ樂しさうにも思はれて……。いつとはなしにさうなつて來た私の氣持の遷り變りから思ふと、六年は、「たつた」どころかずゐぶん永い歳月だつた。とかく「ドライ」を賣り物にしたがる桑田の榮さんが、

「花嫁姿がどんなによく似合ふだらうと思はれる年頃に、喪服を着せるなんて、三輪さんも、なんて憎らしい人だらうねえ」

と、たつた一度、出棺の間際に、アヤ子にことよせて號哭に泣いてくれたが、あの娘にしても、今年はもう數への六になつたのだから……あゝあ、早いといへば早いもの……。

あんなにやきもきした揚句、何もかも滯りなくすんだあとでは、ほツとしたやうな、同時にまた味氣ないやうな今の心持だ。間宮さん、田口さん、平山さん、みんなお忙しい方々なのに、駒込のお寺から精進落しの晩御飯まで、ちつともお義理らしい風はなく、三輪に對す

る友情、といふより心からの愛情で、六時間あまりもお付き合ひくださつた。それに、大阪のお住居ゆゑ、わざと御遠慮申しあげた小野寺さんまで、今朝、偶然社用で上京なすつたとか、間宮さんがお寺へおつれくだされ、お焼香をすませるなり忙しさうにお歸りだつたけれど、思ひがけなかつたことだけに、これはひとしほの嬉しさだつた。皆さん、どうしてかうもよくしてくださるのか。私のためだなどと、夢にもそんな自惚は抱きはしないけれど、認められたと言つたところでごく少數の人たちの間だけ、畫業なかばにして斃れた三輪昌介といふ、氣むづかしやで、交際下手の、變人といつてもいゝやうなあの人のことを、死後六年經つ今もつて、……それを思へば、空恐しい、とでも言ひたい氣持にもなるし、「やつぱり、それに價するほどの人柄だつたんだなア」と、……これが私の癖なのかしら、何かにつけて氣持が二つに割れて、一方ではぞく〳〵するほど嬉しがつてもゐるのだが……。

精進落しの時間、人數、獻立、値段などから、寫眞を飾る床の間の設備まで、手落ちなく間宮さんがお世話くださつた魚庄といふ築地の料理屋は、一度もつれて行かれた憶えはないけれど、生前三輪の贔屓にしたうちで、よく皆さんと御一緒したとか、大層おいしく、お酒

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

もお話もはずんで、「和氣藹々」とでも言ひたい雰圍氣だつた。氣さくに、づけ〳〵ものを仰有る平山さんなどは、「會費要らずの同窓會つてのは氣に入つたなア。どうです、秋子さん、來年から、八回忌、九回忌と、毎年續けてやらうぢやアありませんか」と皆さんを笑はせておいでだつた。前にさんざ制めて置きながら、桑田の小母ちやんまでいゝ御機嫌で、「賛成！あたしは奥さん側の同窓生代表として、是非とも列席させて頂きますわ」なんて、一緒になつて躁いでゐたが……。

頃合ひよくお立ちになつたお客様方をお送りするつもりで玄關まで出たところ、間宮さんの運轉手が見えないとやらで、主人役の私たちのはうがひと足お先に失禮させて頂くことになり、頼んであつたハイヤーで、途中、榮さんを乃木坂下のお宅まで送り届けてから、神宮表參道に近いアパートに歸り着いたのは、たぶんまだ十時前だつたらう。先に行つてあけて置くやう、アヤ子に部屋の鍵を渡し、ハンドバッグの口を締めながらだつたせゐか、私は階段の途中でものの見事に轉んで了つた。コンクリの角へぶツつけた肘や向脛の痛みより、あたりに散らばるコンパクトやなんかの仰山な音、われながら無態な恰好、恥かしさのはうが

先に立つて、すぐには起き直る氣も出ず、ついてれ隱しの笑ひ聲が洩れて了つた。……と、その時、

「いやアねえ、マヽは。まだ醉ツぱらつてるの？」

二三段上の踊り場と思ぼしいあたりからのアヤ子の聲音には、ついぞ覺えのない輕蔑の、突き離すやうな白々しさが感じられて、はツと身うちが凍つた。

今にして思へば、興安寺から魚庄へかけての六七時間といふもの、ぐんと年齡の隔つた人たちばかりの席で、しかも喪服に適はしい堅苦しさもあり、たまさか話しかけられるお愛想じみたふた言み言にも、吝嗇家の金使ひに似た應答をしてゐたくらゐだから、機嫌のよからう筈はないにしても、しよつちゆう他人樣から、「まるで姉妹みたい」と言はれてゐる私たち母娘が、やつと二人きりになれた途端の、この心臟を刺し貫くやうなもの言ひは、一體なんとしたことか。いつも多少はおヒスを起こす月經の時期でもないし、……いきなり目の前が眞暗になつて了つたやうな、なんともたよりない氣持に突き陷されてゐた。踊り場から百八十度の轉回で二階へ通じる階段ゆゑ、見あげた時には既に姿はなく、バタ〳〵と馳けあがる

らしい草履の趾音も微かだつた。螢光燈のそら〳〵しい光りのなかで、ばら撒かれた品々をハンドバッグに拾ひ込むうち、涙がにじむほど腹が立つて來た……。

普段着に着替へ終はるまで、どちらからもひと言も口は利かなかつた。……臺所の流しに迸る水道の音がして、「水、おいしいわよ。飲まない？」「お湯を沸かして頂戴。あたしはお茶が飲みたいから」突慳貪にさう答へて了つてから、その實は、初めて咽の渇きに氣がついたのだが、茶を淹れたりすれば、なんか口を利くことにならうし、口を利くとなれば、どうしたつて詰問の調子が出るだらう。この腹立たしさでは、つい喧嘩腰にならないとも限らない。持つて歸つた三輪の寫眞は、まだいつもの場所に吊らず、食器棚の上で壁に倚せかけてあつたが、その前で、七回忌の法要をすませたばかりの今夜、母娘して……。少しくらゐの咽の渇きは我慢しても、このまゝ寢て了つたはうが無事かも知れない。

「お湯、要りません」

「どうして？　あたし、お紅茶飲むわよ」

「どうぞお勝手に。あたしは、今夜は早寢」

カーテンの蔭なる寢臺は、蟹の横匍ひのやうにしてはいらなければならない隙間で二つ竝べてある。わざと枕頭の臺電燈も點けずに、その一つに身を横たへたが、むろん眠れるどころか……。小一時間も經つてから、居間の電燈が消え、ごそ〳〵と寢床にはいる音がした。……よさう〳〵、言ふにしても明日のことだ、と思ひながら、やつぱり口を衝いて飛び出すやうに、うつかり、

「アヤちやん」

と呼んで了つた。すぐには返事がないので、「あんたまだ眠てやアしないんでせう？」

「えゝ」

いつもなら「うん」のところが「えゝ」だつた。

「一體、どういふの？」

「何が？」

「何がぢやないわ。あんた、いやに反抗的なのね。何が氣に入らなくつて、そんなにプリプリしてるの？」

闇のなかに、むら〳〵と灰色の煙のやうなものの滲(うつま)き搖れる沈默だった。「ねえ、はつきり仰有いなね」

「もうすんぢやつたことだから、……それも萬事好都合にいつたんだし、今さら言つたつて始まらないでせう」

「さう。でも、今日の御法事に、なんかよツぽどあんたの氣にさはることでもあつたのかい？」

「いろ〳〵難癖(なんくせ)をつけときながら、いざとなると嬉しがつてる、桑田の小母ちやんみたいなあんな器用なまね、とてもあたしにやア出來ない。不愉快だつたわ」

「ぢやア、あんたも、法事なんてよしたはうがいゝと思つてたのね？」

「さうよ。でも、それは、マヽがなさりたいやうになさつたらいゝと思つてたから、餘計な口出しなんぞしなかつたぢやアないの」

「今夜の榮さんの態度は、あたしもちよつと氣になつたんだけど、パヽの御親友の方たちが、あんなに愉快さうにしてゐなさる席なんだから、あれでいゝんぢやアないかしら」

「さうね、マヽなんぞ足もとにも寄りつけない社交家なんだから、あれでもまだ内輪にしてたのかも知れないわ。……あゝ、誰かも言つてたけど、あれぢやアまつたく同窓會ね、宴會ね。マヽも思つたよりずうツと社交的だつたし……」

「だつてそれア、御法事はお寺ですんで、あとは、お忙しい方々においで頂いたお禮の……」

「精進落しとかつて言葉も、あたし嫌ひだなア。落すも落さないも、もと〳〵精進なんて氣持、誰ひとりありやアしないのに……。なんだか、パヽがいゝ煮汁に使はれてるみたいで、……ともかく、とてもいやだつたなア」

「あんた、ちつとどうかしてやアしない？　世間の慣習つてものを、……それも、亡つた方に對する愛情や尊敬を、何かの形で表はさうとする善意の催しにまで、そんなひねくれた難癖をつけるなんて……」

「あたし、法事をつまらないことだなんて、たゞの一度も思つたことないわよ。お寺で、チンプンカンプンなお經を聞いてる間でも、お燒香をしてお辭儀をした時でも、普段、うち

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com